

第6回体の動きを高める運動部会記録

参加者：畠中 岡田 河野 山本 坪根 関川 土屋 古川 藤井 戸澤 鈴木

1. 部長より

① 今後の予定

7/12（火） 実証授業①

7/21（木） 講師派遣

7/27（水） 講師派遣

7/25・26・28 夏部会①（会場未定） 実証授業①の成果と課題・抄録について

8/8・9・10 夏部会②（会場未定） 夏季合研資料について

（予備）8/15・16

8/17（水） 夏季合研（千代田区立 昌平小）

9/5の週 実証授業②に向けて

9/13（火） 正副部長会

9/20の週 実証授業②

② 夏季合研に向けて

日時 8/17（水）8：45～10：45

場所 千代田区立 昌平小学校

参加 オンライン（各部10名までは現地）

PPT作成（ ）

報告者（ ）

協議司会（ ）

2. 実証授業①に向けて

《導入について》

（坪根）導入⇒事前に何を取り上げるかを決めておいた。（「目的に関する問い」・「ポイントに関する問い」）

《柔らかさを高める運動について》

【行い方を押さえるべきか】

○「もとの動き」と位置付けて押さえたい。目的が分らないと意欲が減退する。

○輪くぐりについて

・足を揃えない。揃えると伸びない。

・柔らかさが高まりそうなくぐり方を取り上げて紹介。

教師がよくない動きを例示して比較するとわかりやすい。

- ・適当にやろうと思えばできてしまう。
 - ・今日は、柔らかさの高まりを実感した子どもはいなかったのでは。
- 「必要感」をもたせるために、スキャモンの成長曲線などを用いるのはどうか。
- ⇒「この時期に高まるのは柔らかさだ」という認識がないと、やろうと思わないのでは。

《巧みな動きを高める運動について》

- 運動の行い方の掲示を行う。
- ⇒どこの体の動きを意識すればよいかわからない。
- 掲示に付箋でもいいが、Jam board などを活用できるとよりよい。
- タブレットだけだと、何をもとに考えているのかが見えづらい。紙での掲示も有効。
- ポイントタイムについて

《授業者の困り感》

- ・共有するときの人数（今は 10 人程度）
⇒もう少し小集団に（5 人程度）
- ・ホワイトボードを使うことが有効なのか。（書く子が限定される。）
⇒付箋を活用すると、一人一人書ける。自分事として考えられる。
△付箋を活用すると、書くことに集中して話し合わなくなることもある。
- ・個人のアウトプットだけではなく、話し合いをしてほしい。

☆①人数を減らす ②ホワイトボードを増やす☆

《第3時に向けて》

- 第3時では、全体共有で「ポイント発見」⇒「工夫／関わりについて」というふうに広げていきたい。
- 「多様な動きをつくる運動」のポイント発見と「体の動きを高める運動」のポイント発見の違い

⇒ポイント発見の仕方は変わらないが、工夫をする際、多様では「楽しむための工夫」だが、高めるでは「動きを高めるための工夫」になってくる。だからこそ、「目的に関する問い」についてきちんと押さえ、「巧みとは何か?」「高まりとは何か?」を子供たちと共有した上で、工夫をしていく必要がある。

- 柔らかさの高まりを実感させるための手立て

- ⇒①教師の言葉掛けで「はじめと比べてどう?」「前回と比べてどう?」など、以前の自分との比較を行うとよいのでは。
- ②仲間の動きを見て、どうすればより伸びるのかを考えるとよいのでは。
- ③長座体前屈の器械で計測する。

- 何を試行錯誤させるのか。

⇒ポイントを見つけるだけでなく、
「高まりって何」ということを共通理解して、
「どうやったら高まるの」⇒「仲間と協力する」「動きを工夫する」
などということ共有することも大切。そうでなければ、体の動きを高める運動にならない。

3. おわりに

○授業の中で、「自己評価をしている様子」をどうすれば見取れるのか。

⇒第2時では教師の介入によって、自己評価している場面はあった。

教師がいなくても自己評価をしている姿が見られるのか。

(授業前に確認して、実証授業①ではその視点をもって参観する。)